

妻への恩返しと思い込めて…“最後の絵画展”、 「ありがとう」をカタチにした筋ジストロフィーの男性（仙台市）



◇ ◇ ◇

【動画を見る】ありがとうを形にした“最後の絵画展”、アート表現 続けてきた筋ジストロフィー患者



筋ジストロフィーという重い病の患者でありながら、アート表現を続けてきた仙台市の男性についてです。

ありがとうを形にした最後の絵画展が、5日から始まりました。



5日からせんだいメディアテークを会場に始まった絵画展。仙台市在住のアーティスト・山下重人さんの作品30点が展示されています。



来場者

「カラフルで元気な色で生命力や命、パワーを感じました」
「丁寧だなと思って。色々な作品を作っているので感心しました」



今回のメインとなる作品が「使命とは己の命の使い道」です。

山下重人さん(52)です。

作品は、仙台市宮城野区の自宅のベッドの上でパソコンを使って描いています。手先でタブレットの上のペンを器用に使って絵を描き、コミュニケーションは文字を打ち込んで自動音声で伝えます。



山下重人さん(52)

「(Qどうして創作活動している?)子どもの頃から画家になる夢を持っていたからです。社会的な環境や病気の進行の影響を受けながらも、諦めず創作を続けてきました」

山下さんの病気は、進行性筋ジストロフィー。

遺伝子の変異により、体の筋肉が徐々に壊れ衰えていく難病です。



山下さんは、1973年 宮崎県で生まれました。
病気が判明したのは、3歳の時。
小学1年生の頃に階段を上がれなくなり、3年生で車いす生活に一。

一番楽しかったことは絵を描くこと、将来の夢が決まりました。

病気は進行し、18歳の頃には自分の力で車いすに乗ることもできなくなりました。



山下重人さん(52)
「子どもの頃から悲観していません。病気は友人だと思っているので、戦っている感覚はないですね、病気だから小さなことでも幸せを感じられるし、他では得られない壁を上っていける経験は、創作の強みにもなっていると思います。病でなければ平凡な人生を送っていたと思うことも、あります」

21歳の時に、仙台市の重度障がい者施設に入所。
そして、27歳の時 良恵さんと結婚しました。



【現在は、良恵さんのサポートを受けながら、IT企業の正社員として在宅ワークをしています。
また、京都芸術大学の通信課程で芸術の知識やデザインを学び、この春卒業しました。
1つの作品を完成させるのには、2週間～1か月半ほどかかります。
その活動を、誰よりも応援してくれる良恵さんへの恩返しの思いも込めて、今回の個展に臨みます。



山下さんの20年ぶりとなる個展が、5日から始まりました。

山下さんにとって、絵は障害に限らず傷つき、もがき苦しみ、生きる希望を見失った人たちが、それを本気で支える人に向けたメッセージ。
そして、今回の個展を自分を支えてくれた人たちに感謝を伝える集大成。
最後の展覧会としています。

山下重人さん(52)

「個展は人手や体力も必要で、そんなに何度もできないことなので、悔いのないよう最後と位置付けています。私のような境遇でも、しっかりサポートを受けられれば、これほどのものを生み出せるということを皆さんに見ていただいて、自分もチャレンジしてみようという気持ちを感じてほしいです」



幼い頃から病と共に生きてきて出会った一つ一つの色、言葉、人、それらすべてが人生を照らしてくれた。
そして、作品を見た人の心に明かりを灯したい。
アートに全身全霊を注いできた山下さんの思いです。